

論文名：Impact of Oral and Swallowing Function on the Feeding Status of Older Adults in Nursing Homes（施設入所高齢者の口腔と嚥下機能が食事状況にもたらす影響）要約

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 Sirima Kulvanich

---

ここから記入

摂食嚥下機能が低下した要介護高齢者に対しては、栄養の維持という観点のみではなく、誤嚥や窒息事故を予防する目的で摂食機能に応じて食品形態が調整されている。しかしながら、施設などでは、食品形態の調整をどのように行うかについては介護現場で働くスタッフの判断のみに委ねられていることが多い。過去の報告では、要介護高齢者に対して提供されている食事内容と摂食嚥下機能との間にアンマッチが生じているとされており、現状の食形態が利用者の機能にマッチしているかどうかについては必ずしも検証されていない。摂食嚥下機能が低下した嚥下障害患者に対する食品調整に関しては、これまで消費者庁、農林水産省、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本介護食品協議会から独自の指標が提供されている。そこでは、食品の硬さ、凝集性、付着性という物性が食品摂取の困難さを決定するとしているが、これらの規準値は統一されていないことに加えて、いずれの指標も患者の障害の程度を明確にしておらず、結果的にはどのような患者にどのような食品調整を行えばよいかという疑問には応えていないことが懸念される。

要介護高齢者にとって食べることは一日の中で最も高い関心事である。適切な評価をもとに適切な食事を提供することは、個人の生活の質（Quality of Life, QOL）を維持するためにも早急に解決しなければいけない問題である。本研究では、施設入所者を対象として、摂食嚥下機能評価ならびに施設で提供されている食事場面の評価を行うこと、対象者の健康維持に義歯をはじめとする口腔環境がいかなる影響をもたらすかについての調査を行い、要介護高齢者の摂食嚥下機能と食品形態のマッチングに必要な歯科医療におけるサポートの必要性を考えることを目的とする。

## 2. 方法

(1) 対象：新潟県内の特別養護老人ホーム入所者のうち経口摂取を行っている者

(2) 調査内容：カルテから抽出した基本データを抽出し、簡易的個人評価ならびに食事評価を実施する。基本データには、生年月日、性別、BMI、要介護度、基礎疾患の既往歴・現病歴、服薬、その他の特記事項（自由記載）とし、簡易的個人評価には、歯式、顎口腔顔面・四肢の運動感覚機能、嚥下機能のスクリーニングとして改訂水飲みテスト、ゼリーならびに米菓を用いたフードテスト、ボードを用いた簡易的食認知テスト、その他の特記事項とした。食事評価内容は、食事形態、食事摂取時間、食事摂取量、食事介助の有無と程度、むせ・食事拒否などの有害事象、咀嚼の有無と頻度、その他の特記事項とした。

## 3. 結果と考察

対象者は37名（女性32名）、平均年齢88.0歳、平均BMI17.8、要介護度4.1であり、

## 【別紙 2】

いずれも特別養護老人ホーム入所者の平均レベルよりも若干低かった。EichnerA の者はおらず、B は 9 名、C は 15 名、義歯使用が必要であるにも関わらず不使用者は 21 名であった。改訂水飲みテストにて 4 点以上の者は 24 名、ゼリー使用時のフードテスト 4 点以上は 35 名、米菓使用のフードテスト 4 点以上は 18 名であった。食認知テスト合格者は 10 名のみであった。食形態について、普通食の者はおらず、主食についてはいずれも粥またはゼリー粥、副食は刻みまたはペーストであり、その結果 FOIS (Functional Oral Intake Scale) のレベル 6 が 10 名、レベル 5 が 19 名、レベル 8 が 8 名であった。食事介助については不要が 14 名、見守り 2 名、一部介助が 7 名、全介助が 14 名であった。次に、各パラメータと食事条件の相関を求めた。Eichner と食形態の間で認められた相関は、食品のとりみの有無のみであり、義歯使用と食形態の間には相関が認められなかった。一方、食形態、食事介助のいずれの間にも有意な相関を認めたのは米菓使用のフードテストであり、米菓摂取可能な対象者はいずれも上位であった。食認知テストの間に有意な相関を認めたのは食形態のうち、副菜のみであった。その他、顎口腔顔面の運動麻痺、四肢麻痺、服薬状況と食形態の間には有意な相関が認められなかった。

以上の結果は、米菓を用いた食品検査と食事形態との関連を強く示すものである。介護食の食形態の条件にはそぐわないと思われる米菓摂取における観察の観点は、食認知と咀嚼であるが、同時に咀嚼・嚥下の両方のパフォーマンスを評価できるという利点を考えると、このテストは、要介護高齢者や家族、施設スタッフが、対象者の食事レベルを決定するための簡単で有用な評価になる可能性があると考えられる。